

歴史よもやま話 その 22

「土用の丑の日」に鰻を食べることを提唱した平賀源内

今年も暑い夏がやってきた。暑い夏には滋養強壯のうなぎを食べるのが一番だ。このことを提唱した人が江戸時代にいた。平賀源内である。

一説によれば、安永・天明の頃（1772～1788年）、夏に鰻の売上げが激減することに困り果てた鰻屋が源内先生に相談したところ、「本日丑の日」という張り紙を店先に貼り出すことを薦めた。するとその鰻屋は夏に大繁盛した。

他の鰻屋もそれを真似するようになり、土用の丑の日に鰻を食べる習慣が始まったという。正式な史料が残っておらず、俗説の域を出ないが、今日まで知られた話である。

平賀源内といえば「エレキテル」、日本で最初に静電気をつくった発明家（*）として有名だが、実はこの他にも浄瑠璃作者、西洋画家、鉱山開発など多様な顔を持ったマルチタレント、異才の人だった。

（*）東京深川に「平賀源内電気実験の地」の碑がある。

「解体新書」の杉田玄白とも付き合いがあり、「（源内は）生れつき物の理を悟ることが早く、時代の風を読むことにも長けた才人である」として、彼の墓の隣りに碑を建て「嗟非常人 好非常事 行是非常 何死非常」と非凡な才能を讃えた。

長崎留学時代に西洋画法を学んでおり、彼が描いた「西洋婦人像」が神戸市立博物館に所蔵されている。また、鉱山開発で秋田を訪れた源内は、阿仁銅山に向う途中立ち寄った角館で小野田直武に出会い洋画法を伝授した。のち藩命により江戸に上った直武は源内から本格的に西洋画法を学び、帰藩後、藩主・佐竹曙山に画法を伝授した。そして、曙山と直武の二人が中心となって洋風画派「秋田蘭画」が形成されていった。

なお、小野田直武は源内の紹介により、杉田玄白たちが取組んだ「ターヘルアナトミア」の翻訳作業のうち、大量の挿絵を写し取ることを担当した。「解体新書」の序文に「下手ですが、断りきれないので描きました」と書いている。

安永8年（1779年）、大名屋敷の修復を請負った際に、酔って修理計画書を紛失し、大工棟梁に盗まれたと勘違い、殺傷してしまう。

そして投獄され、獄中、破傷風のため死亡してしまう。享年 52 才だった。